

呼びかけの練習をどうするか

目的意識と到達点を示す。

まず、なぜ呼びかけをするのかを子どもたちにしっかりと話ししていただくとよいでしょう。子どもたちに、ある活動をさせるときには必ず趣意の説明が必要です。これをしなければ学習活動には常に「やらされ」感がつきまといまいます。

その後、到達点を示してください。例えば、学芸会の劇の指導では「お客さんが泣くくらいの演技を」と私は言います。呼びかけなら、昨年の卒業式の呼びかけのビデオを見せて、「これくらいにかっこよく」と言ってもいいでしょう。

一時に一事を指示する。

例えば、呼びかけの指導をするのには次のような指導項目がおおざっぱに言って考えられます。

立ち方、声量、スピード、間、息の吸い方、顔の角度。

これらを、バラバラにIPPENに教えてはいけません。

一〇分の指導時間なら、一つだけ教えるのです。

個別に評定する。

例えばこんな風に言っておきます。

「明日から、呼びかけの練習をします。明日は声の大きさだけを、先生は見ます」

次の日、1回だけよびかけをさせます。その後このように指導します。

Aさん、Bさん、Cくん、Dさん、Eくん、ちなさい。あなたがたは、体育館で聞こえるくらいの声になっていませんでした。明日もやりますから、がんばってください。

今呼ばれなかった人、起立。

あなた方は合格です。

明日もその調子でやりましょう。

これだけです。

個別に評定するから、子どもは教師の指導を「自分ごと」として聞けるのであって、「みなさんは～」という「みなさん主語」は個々の子どもたちには伝わりにくいのです。